



今は前進あるのみ

——授業の足跡をたどって——田口 有理

1 卒業生に贈る二つのメッセージ

38年間の教職生活で、卒業生を何度も送り出したが、その度に贈ったメッセージは、「たとえば、投票したい人がいなくても選挙には行きましょう。棄権はしないこと」と「過去をふり返ることは時には大切ですが、過去を懐かしんであの日に戻りたいなどと思うことはやめましょう。今は前進あるのみ」。

初めのメッセージは卒業式に限らず、授業でもよく言っていたし、18歳選挙権になってからは主権者教育が強調され、世の中全体のテーマになり、マスコミもこぞって選挙に行こうと促している。それにしても、文科省は、教員に投票に行くように言わせていたのに、投票日の翌日に「昨日投票に行きましたか？」と聞いてはいけなとか、主権者教育は政治的中立性を保たなければならないとか、何かと縛りをかけてくる。そのような中で、私たちは生徒を「主権者である市民」として育ててきただろうか、自信がない。

二つ目のメッセージは、自分自身にも言い聞かせていたことだ。だから、教職生活をふり返ることは、私のモットーに反するのだが……

2 「つかみ」が大事！

こういう前置きのようなことを考えるのが、私の授業づくりのポイントだった。本論の展開より序論の動機付け。お笑いもドラマも授業も、はじめの「つかみ」が大事だろう。ただ、肝心の本論の中身が今一つなのが問題で、これまでいい加減にやっていたことを反省するばかりだ。それでも、「つかみ」を工夫することで、生徒が授業の世界にスムーズに入るように、ウォーミングアップをすることは大切だと思っている。

また、授業の方法を工夫することは教材研究の重要なテーマでもある。最後の赴任校だった前橋清陵高校で取り組んだ「アクティブ・ラーニング」「哲学対話」「VTS」などは私にとって大きな意味

があった。

授業について記すのが私の痕跡になると思うので、それらをふり返ってみたい。

3 机上の空論より実践をしたい！

2020年度から始まった新しい学習指導要領の肝は「主体的対話的で、深い学び」だというのが、その10年ほど前から対話型の活動が注目され、あちこちで研修会が開かれた。高教組では2008年度の教育のつどいに金子奨さん(埼玉県高校教諭)が招かれ、コの字型の机の配置で対話型の授業を初体験し、新鮮な驚きを感じた。その後、金子さんの師である佐藤学さんの「学びの共同体」、溝上慎一さんの「アクティブ・ラーニング」など、研修会に参加して刺激を受けた。また、大学発教育支援コンソーシアム(東京大学 CoREF)による「協調学習の授業づくり推進プロジェクト」をのぞいて、「知識構成型ジグソー法」を知り、授業に取り入れてみた。

幸い、前橋清陵高校には授業を工夫しよう、いろいろやってみようという仲間がいて、試行錯誤も楽しかった。教育界はアクティブ・ラーニングブームで、時流にのったといえるのかもしれないが、ブームであろうとなかろうと、目の前の生徒たちが授業にのってくる感じや、話し合いながらあれこれ考え工夫する姿を見ることはうれしいことだった。

実は、私は大学で教授学習心理学を学び、どのようなはたらきかけが生徒の能力を伸ばすのかを研究していた。在学中は大した研究はできなかったし、早く学校現場で実践しなければ、机上の空論だなどと思っていた。教員生活も終わりに近づいて、机上の空論ではなく、実践しつつ研究することができたのかもしれない。いや、「研究」はおおげさで、いろいろやってみたということだ。

4 「哲学対話」が定着した

「哲学対話」は教育の場だけでなく、ビジネス

界でも話題になったものだ。私の場合、同僚から紹介された『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』（幻冬舎新書）と著者の梶谷真司さんの指導による都立大山高校での哲学対話を取り入れた実践報告がきっかけだったか。

哲学対話がどういうものか、自分でも体験したいと高崎の書店・レベルブックスの2階で開かれた哲学対話イベントに参加し、その後授業にも取り入れてみた。教員はファシリテーターを務めるがあくまで進行役で、発言は控えなければならない。しかし、ついついしゃべってしまい、反省が多かった。

その後、前橋清陵高校では、哲学対話を放課後、定期的に行ったり、公開授業では全クラスで取り組んだり、先生方の努力で定着していった。

5 VTSで生徒の発想に感心

最後に、私にとって取り組みの途中であり、今後も学びたいと考えているのが「VTS」である。VTSとはVisual Thinking Strategiesの略で、「アートを通じて鑑賞者・学習者の『観察力』『批判的思考力』『コミュニケーション力』を育成する教育プログラム」（京都造形芸術大学アート・コミュニケーションセンターHPより）でアート作品の「対話型鑑賞」のことだ。

倫理の授業の導入部分に取り入れたのだが、倫理の教科書には、多くのアート作品が取り上げられていることから導入を思いついた。使っていた教科書（清水書院）はラファエッロの『アテネの学堂』が表紙を飾り、第1章「人間とは何か」ではゴッダの『われらどこから来たのか、われら何であるのか、われらどこへ行くのか』、第2章「青年期の課題と自己形成」ではムンクの『思春期』が登場する。

VTSを取り入れるまでは、私が作品の解説していたのだが、そうすると、生徒は作品を知識として受け取り、味わうことは二の次になりがちだった。VTSでは生徒に作品を提示して、3つの質問をする。「この絵の中で、どんなことが起こっていますか？」「あなたは、何を見てそう言っているのですか？」「もっと発見はありますか？」

授業では生徒を4人ずつのグループにし、3つ

の質問について対話させる。ここで教育DXの登場。Chromebookを活用し、生徒は自分の感じたこと考えたことをjamボードというツールに入力すると、簡単に共有できる。生徒は自分とは異なる意見を見て、様々な気づきを得ることができたようだ。

生徒が授業をふり返って書いた感想を紹介したい。「VTSでは、その絵を見れば見るほど、ここはこういう意味が込められているのかな、作者はどのような意図でこの情景を描いたのかなど、色々な考え方ができて楽しかったです。また、他の人の意見を聞くことで、見えなかった、気づかなかった部分が見えたり、知ることができたりして、毎回面白いなと思いました。」「VTSをふり返ってみて、宗教に関する絵は人間の考えや思いが強いなと感じました。思想などを絵で表現する人間は不思議だなと思います。」「はじめはあまり意見を出せず、好きではありませんでした。やるにつれて色々書けるようになり、よかったです。機会があれば、『原罪と樂園追放』の見られなかった部分を見たいです。」

VTSのファシリテーターとしてトレーニングを受けておらず、あくまでも自己流だが、授業のウォーミングアップとして毎時間取り組んだ。「観察力」「コミュニケーション力」については、少しは育成できたのではないかと考えている。また、私自身、生徒の様々な発想に感心することが多く、楽しい時間だった。今後どのようにVTSに関わっていくか模索中だが、まだまだ学ぶべきことがある。そう、今は前進あるのみ！

などとはりきったことをいっているが、これまでどれほど多くの方々にお世話になり、励ましていただいたか知れない。最後になりましたが、深く感謝いたします。

